

17-1 御勅使川扇状地で、武田信玄の土木遺構をみる (自動車利用距離約 80km)

コンクリートで固められた現在の治水工事と対比してみることで、自然と調和した武田信玄の治水事業の偉大さを感じる旅に出る。

地図豆知識：扇状地と土木遺構をたずねる

南アルプスを水源として西から東へと流れる御勅使川は、北から南へ流れる釜無川に、ほぼ直角に注いでいる。

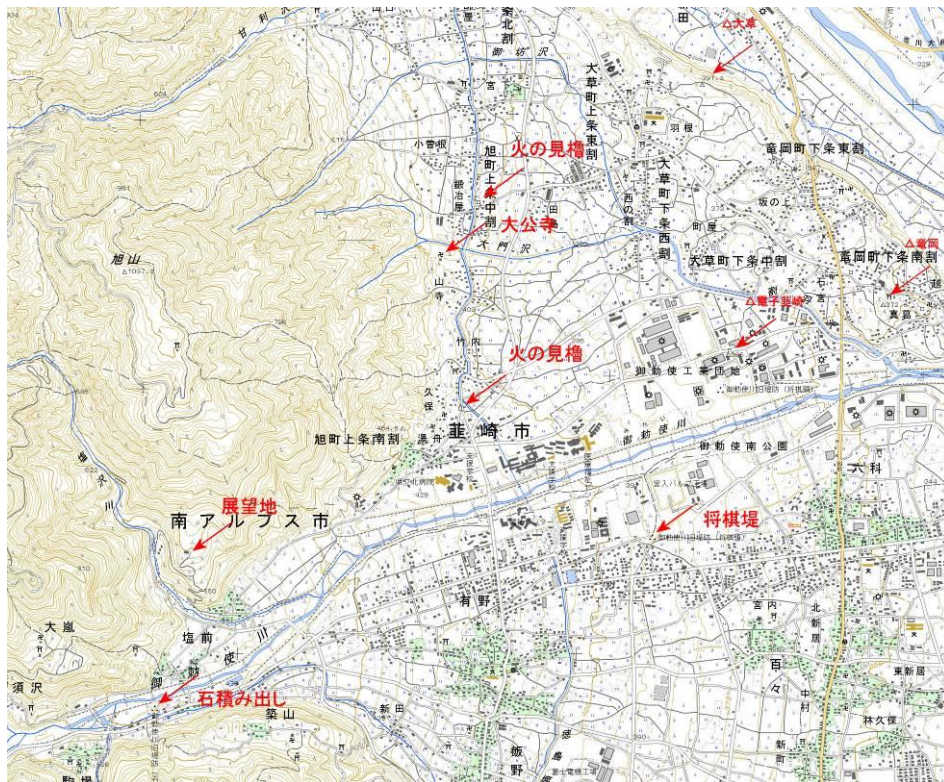


図 3-15. 勅使川扇状地 (山梨県韮崎市・南アルプス市)
(1/25,000 地形図「韮崎・小笠原」)

地図全体を大きな目で眺めると、西(左)の塩前集落から南北(縦)に流れる釜無川に向けて、集落や耕地が大きな三角形になって広がっているのが明らかである。

そのようすは、五本ごとに太くなった等高線(計曲線)を、大まかに着色してみると、さらに明らかになる。

塩前集落より西の勅使川沿いのこみあった等高線とは、比べものにならないくらい緩やかになった扇型の傾斜地は、塩前集落あたりを手首として、手のひらを広げたような丸みを帯びた断面を保ちながら、しだいに標高を低くして広がっているのがわかる。

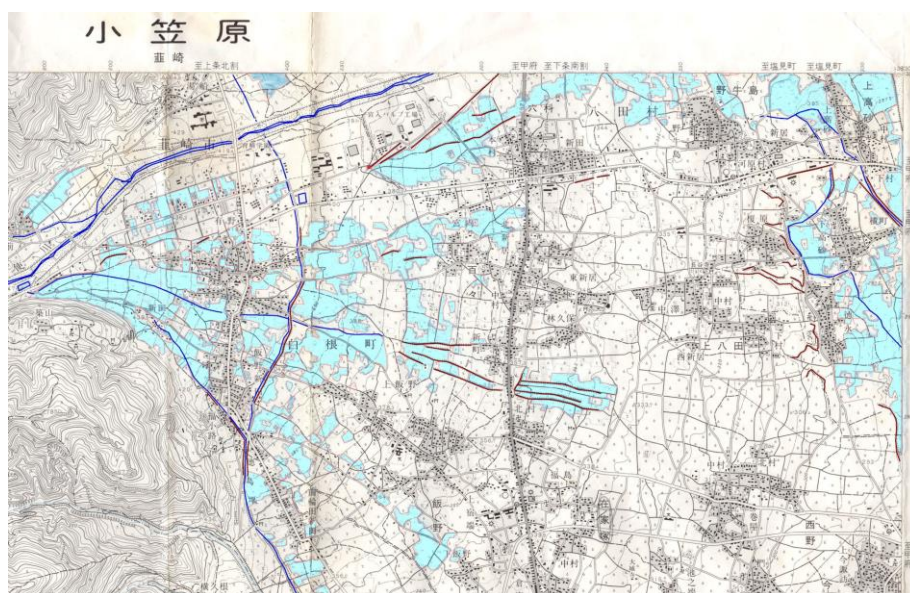
これは、長い年月の間に、勅使川がなんども流路を変えながら土や砂礫を堆積させた結果できた地形である。

上流では両側を山体にはさまれて流路を固定してきた勅使川が、塩前集落付近の谷口に到着して開放されたさまは、急に手を離れた水道のホースのようになって、洪水のたびごとに流路を変更し、山地部で掘削・運搬してきた土砂を下流に堆積させる。

こうした地形を扇状地と呼び、勅使川扇状地は、富山県黒部川扇状地、岩手県胆沢川扇状地と並んで、日本三大扇状地として知られている。

勅使川が流路を変えた痕跡は、細かな等高線などを注意深く見ると発見できる。開発が進む以前の、国土地理院が過去に発行した地図（「旧版地図」と呼ぶ）で、小さく連続する谷（水色）や、土手の高まり（茶色）をつないでみると、あたかも指を広げたようなすじが数本見えて、旧河川跡を表現していると思われる。

事実、専門家の現地調査の結果からは、最も北に位置する現在の本流路のほか、北から前御勅使川、御勅使川南流路、下今井流路、十日市場流路の5本の旧河道痕跡が発見されている。



勅使川扇状地では、もう一つ特徴的なことがある。

勅使川上流には、マグマが冷え固まってできた火成岩や温泉の影響を受けたもろい地層があって、岩石の風化と流出が多くあった。その結果、河川の浸食などを受けた土砂が扇状地を流下しては、水害を起こし、周辺農地などに被害をもたらしてきた。

当地を治めていた武田信玄（1521-1573）は、この状態を打開するため、御勅使川と釜無川の合流地域での河川事業を実施する。

御勅使川を「石積出し」（上図の左端）という名の石積みの堤防で、流路が南方向へ触れないように固定し、その水流を「将棋頭」と呼ぶ将棋の駒のような形をした堅固な堤に当てて、分流させ、洪水時の水流を弱めたのである。

その水流の一方を、釜無川沿いの自然の岩壁である「高岩」方向へ流す。高岩に当たった乱流を「聖牛」と呼ばれる木組みで整え、そののちは堅固な「（信玄）堤」が、下流へと導く。

「石積出し」や「信玄堤」などには、霞堤と呼ばれる形式を取り入れている。霞堤は、現在のような連続する堤ではなく、適当な場所に切れ目を入れた断続的な堤防である。洪水時には、切れ目から一部の水流を逆流させ、堤の周辺に用意された遊水区域に洪水を取り込む。

水位が下がれば、その切れ目から排水させる。さらに、平時の耕作地などに降った雨水も容易に、ここから排水される。こうした堤は、洪水時の負荷は少なく、決壊の危険性も少なくなる。

地図が少しだけ読めれば、武田信玄らのした治水工事の素晴らしさを垣間見ることができるだろう。そして、地図をもって現地を訪問すれば、さらに大きな収穫が期待できる。

現在の御勅使川は、堤防でしっかりと流路が固定されて直線的に流下し、釜無川と合流している。その間には、巨大なコンクリートでできた床固工と呼ばれる構造物が、これでもかと思うほど並び、河川とその周辺は遊水機能をもたせる余裕もないほど開発され、可住地などからの内水処理も強制的になっている。

コンクリートの連なりを見るにつけ、自然と調和した武田信玄の治水事業の偉大さをさらに感じるはずである。

【道順】

(東京)→00 芦安山岳館→01 現在の砂防堰堤→02 芦安金山沢温泉→03 日本最古の蘆安堰堤→04 現在の崩落防止→05 石積出し→06 将棋頭 1 →07 信玄の治水計画→08 電子基準点→09 将棋頭 2 →10 高岩→11 釜無川→12 聖牛→13 信玄堤→14 竜王用水→15 勝沼堰堤→(東京)



聖牛

【街歩き解説】

- 00 芦安山岳館：山岳文化の紹介と登山者の交流の場として、2003年に山梨県産の木材を使って建設された。測量と登山に関連する展示物もある。
- 01 現在の砂防堰堤：御勅使川上流にある現在の砂防堰堤は、後に見る武田信玄の堤と大正期のものに比べて、何と威圧的で自然の調和が無いことだろうか。
- 02 芦安金山沢温泉：早速だが、日帰り温泉で少々休み。



現在の砂防堰堤・日本最古の蘆安堰堤

- 03 日本最古の蘆安堰堤：風化しやすく、崩壊が激しい地層を周辺に持つ、御勅使川下流の土砂災害を防ぐために、大正5年に内務省の直轄工事で、日本で初めてセメントを使用して造られた。蘆安堰堤は、上段アーチ式、下段重力式の珍しい構造で、登録無形文化財に指定されている。
- 04 現在の崩落防止壁：御勅使川岸の崩壊地にあった、崩落防止壁。これも、城壁のように威圧的に存在している。
- 05 石積出し：渓谷を流下したのち、谷口に到着した御勅使川は、ここで流路を解放され、洪水時には自由奔放に流れて、下流に被害をもたらした。そこで、石積出しと呼ばれる堤で流路を固定する。
- 06 将棋頭1：断続的に整備された石積出しで、流路を固定された御勅使川の流れは、堅固に作られた将棋頭と呼ばれる堤に突き当たる。その結果、御勅使川は二つに分流されて、その水勢が弱められる。



石積出し・将棋頭

- 07 信玄の治水計画（案内板）：将棋頭近くに設置された案内板によって、多数の石積出しと二つの将棋頭の役割、その後の分流、そして武田信玄が目論んだ御勅使川の治水事業がよく分かる。



- 08 電子基準点：せっかくだから、近くにあるGPS衛星からの電波を受信して、正確な位置を求めるハイテク三角点といったものを見学する。

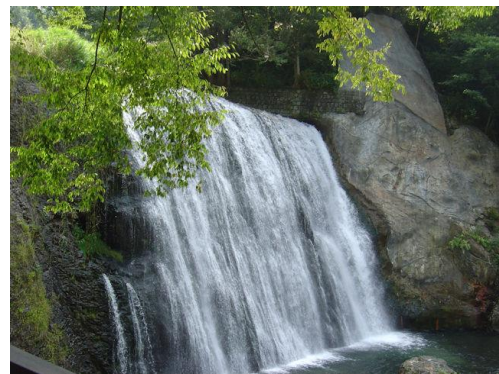
- 09 将棋頭2：ここに、第二の将棋頭があって、御勅使川はさらに分流させられて、水勢がそがれる。一般に扇状地は砂礫層からなり、浸透能が大きいので、扇状地面の降水はすべて地下へ浸透して地下水になる。その地下水は扇端部で湧水となって湧きだして扇端湧水帯を作るのだが、御勅使川扇状地ではどうだろうか。

- 10 高岩：分流させられた御勅使川の流れの一つを、自然の壁といった高岩がその勢いを受けとめた。もちろん、信玄の治水計画は、そのような目論見を持って分流したのだ。



高岩

- 11 釜無川：御勅使川と合流したのちの釜無川の、高岩付近での現在の流れ。
- 12 聖牛：洪水時の水勢を、さらに弱めるために作られた、木材でできた聖牛という構造物は、甲州が発祥の地だという。
- 13 信玄堤 1：高岩などで水勢をやや弱められた御勅使川と釜無川の先にある堤を信玄堤と呼ぶ。甲府盆地をこれらの河川の洪水から守る役割を担ったのが信玄堤である。信玄堤は、これをより堅固にするために、周辺に樹木が植えられた。さらに、堤を断続的にして流れを逆流させることで、勢いを弱め、遊水機能をもたせるなどの霞堤という技術も取り入れた。一連の技術は甲州流（河防法）と呼ばれて受け継がれた。



信玄堤・勝沼堰堤

- 14 竜王用水：御勅使川と釜無川は、一連の治水工事によって、高岩、信玄堤付近で水勢を弱められた。結果、用水の取り入れが容易になり、甲府盆地をうるおす竜王用水が建設された。

15 勝沼堰堤：勝沼堰堤は、祇園淵と呼ばれる日川の蛇行点に、大正6年に作られた堰堤。建設当初の状態が良く保存され、自然を巧みに利用し、堰を流れる水流は、あたかも自然の滝のような美しい景観になり、登録無形文化財に指定されている。

(概略図としてしか使えませんが) ルートマップ

御勅使川扇状地で、武田信玄の土木遺構をみる

マーカーリスト

御勅使川扇状地で、武田信玄の土木遺構をみる
御勅使川扇状地周辺で、武田信玄がした合理的で、自然と調和のとれた河川改修・治水事業を、そして、その後の河川構築物とを比較して見る。
(他用があって、車で出かけたので少々物足りないものになっているが、参考になるでしょう)

- 00 芦安山岳館
- 01 現在の砂防堰堤
- 02 芦安金山沢温泉
- 03 日本最古の崖防堰堤
- 04 現在の崩落防止壁
- 05 石橋出
- 06 将棋頭1
- 07 信玄の治水計画
- 08 電子基準点
- 09 将棋頭2
- 10 高岩
- 11 釜無川
- 12 聖牛
- 13 信玄堤1
- 14 信玄堤2
- 15 竜王用水
- 16 勝沼堰堤

「オフィス地図豆」

ルート再生 停止 巻き戻し 標準

**** オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu ****